アーティスト・イン・レジデンス

高橋彩子

布で世界を旅する

Kanazawa Citizen's Art Center
金沢市民芸術村
PIT5●アート工房

はじめに

私が高橋彩子さん（以下：高橋）のバッチに出会ったのは、友人にすすめられて見た instagram だった。画面に映るバッチを見た時「まるで美しい彫刻作品のようだ」と感じ、更新される投稿を楽しみに待つようになった。二つ以上の国や地域の素材で作られる“アッチコッチバッチ“は、見ることで想像上の旅にでかけることができた。

コロナ禍によって、海外はおろか国内の移動もままならなくなる事態が続くからこそ、金沢市民芸術村アート工房を会場に、“アッチコッチバッチ“の旅を企画したいと考えるようになった。

はじめて金沢市民芸術村の下見に来た時、会場のあまりの広さに驚く高橋に、ここで展示をしていただけないかと依頼をした。「私のバッチのサイズを知っていますか？この会場を埋めるのに、いったい何千個バッチを作ればいいのでしょうか。」と言葉が返ってきて、その場での快諾は得られなかった。

その後、幾度か連絡を取り、2021 年 12 月に企画のひとつであるワークショップの試作品をもって、横浜のアトリエに伺った。高橋はその段ボールでできたバッチを面白がり、そこから本格的に企画の方向性を共有することができ、本展覧会が動き出した。搬入日、高橋の最終的な展示プランがぎっしりと書き込まれた用紙をみて、今日からの 12 日間、想像を越える旅がまっていそうだと胸が熱くなった。

会場内をアッチ（作品コーナー／見る！体感する！）と、コッチ（手仕事コーナー／つくる！）の二つの空間で構成した。

アッチ（作品コーナー）

“アッチコッチバッチ”を軸に、高橋の旅の視点を体感するような展示となった。

モニターから流れる旅の記録写真を通りすぎると、力強いタイポグラフのタイトルが目にはいる。そこから最初に出会うのが、メキシコ、ウズベキスタン、インド、タイなど世界各国の布が吊るしてある《布の森》だ。布に施された刺繍や装飾から、作った人の癖や温もりを感じとることができ、見知らぬ異国の誰かを想像した。布が軽やかにゆれる様子に国境はなく、まるで国々が手をとりあっているようだった。中段壁面には、バッチのつくり方かが書き込まれた《バッチの脳内》が展示された。手書き文字の熱量に圧倒されながら、まるで標本とも図鑑ともとれるこの展示を、熱心に見入る鑑賞者が多かった。階段には人気作品“アッチコッチバッチ”を一点一点丁寧に展示台に設置した。バッチの堂々とした佇まいはまるで生き物のようで、個性あるバッチ同士がおしゃべりを楽しみながら鑑賞者を出迎えたようであった。最上段の壁面には、プロジェクターで拡大したバッチを投影した。バッチと人間のサイズが反転することで、バッチに人間が装飾品として身につけられているような不思議な体感がうまれた。鑑賞者は、旅の最終地点から熱気に包まれた会場全体を眺め、そして帰路へと歩みをすすめる。

コッチ（手仕事コーナー）

高橋による滞在制作と、アートアンツによるワークショップを開催した。

滞在制作では、横幅約 8m の白い壁面にバッチや布を縫い合わせて《布マップ》の制作をした。日々変化する作品を前に、鑑賞者と高橋との交流がうまれた。当初の予定より滞在制作日を 2 日、延長を希望してくれた気持ちの変化が、私達サポートする側にとっても嬉しいサプライズとなった。

バッチをプリントした紙を段ボールにはり、布や装飾品をコラージュして作る《段ボールバッチ》は、参加者の制作意欲を掻き立てた。高橋のもとへ、完成したバッチと国名の書かれたカードを持っていくと、布の原産国を知ることができた。高橋と話し原産国を知ることは、段ボールバッチを世界旅行で手にいれた宝物に変身させた。

一つの会場にさまざまな企画を組み込んだことによって、例えるならば、旅行先の市場に訪れたような感覚で、来場者はそれぞれの好みや関わり方で本展覧会を堪能した。

おわりに

高橋もそうであるように、作家の多くは自分ひとりで作品をつくっている。ただ、企画を作るときは想いを共にした人が関わることで、ひとりではできない何かが生まれることがある。まさに本企画はそうだったと実感する。チャーミングな人柄とバッチにかける情熱が、多くの人の心を動かし、人から人へと伝わり、641 人という来場者それぞれの想いで賑わい、今までに感じたことがないほど充実した企画となった。

最後に高橋が残した言葉を、ここに書いて文末とする。

「いつもは、バッチが私をこの場所に連れてきてくれていると思っていたが、
今回初めて、私がバッチをこの場所に連れて来ることができた。と思えた。」

この言葉は、私達にとって最高の褒め言葉である。と同時にバッチとの関係性に変化がうまれた高橋が、この先どんな旅を続けるのか、ますます目が離せなくなった。きっと、高橋とバッチは私達をみたことのない旅路へと連れて行ってくれることだろう。

モンデンエミコ（金沢市民芸術村アート工房ディレクター）

アーティスト・イン・レジデンス

高橋彩子「布で世界を旅する」

2022 年 3 月 19 日（土）－ 27 日（日）

金沢市民芸術村 PIT5 アート工房

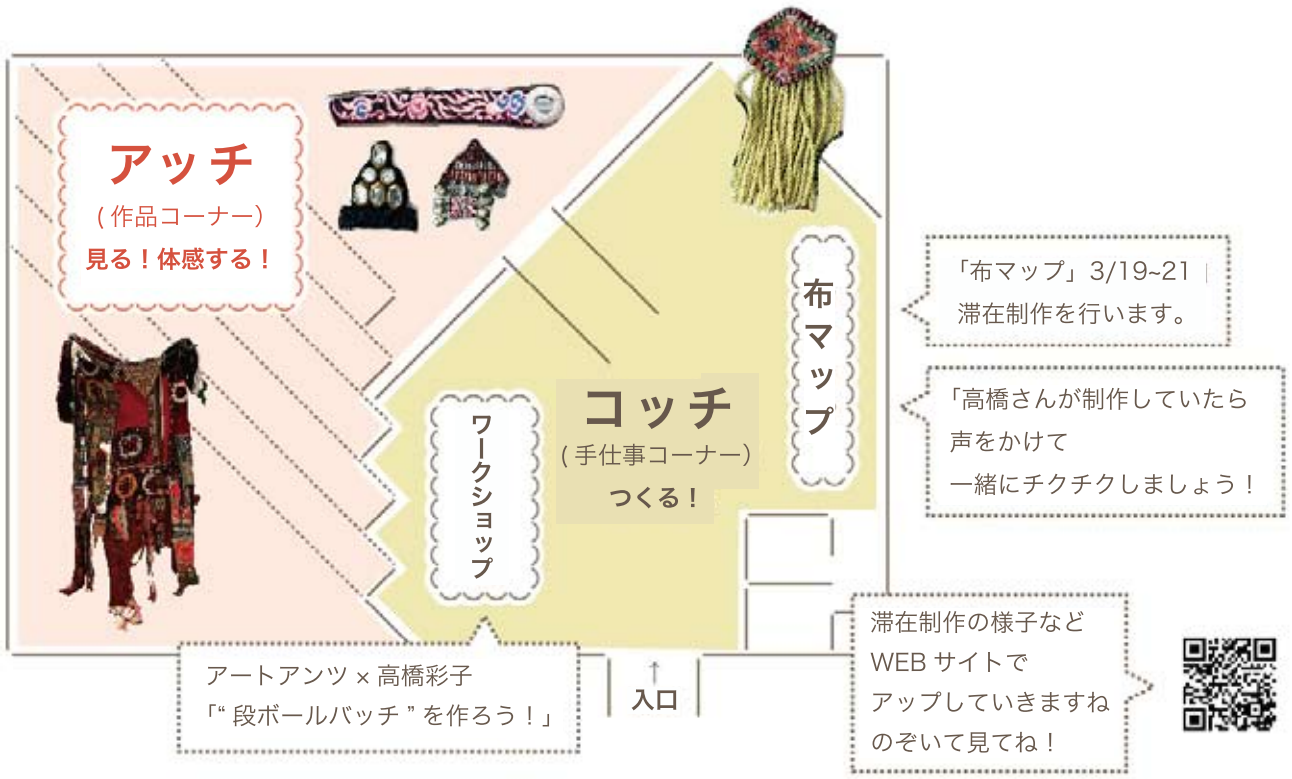
コロナ禍だけど気持ちだけでも旅をしたい！こんな気持ちの時に出会った、 高橋彩子さんの手仕事をご紹介します。
高橋さんの手によって、 2か国以上の布を組み合わせてつくられるバッジ“ アッチコッチバッチ ”は、 まるで彫刻作品のように美しく、 身に着けることで世界旅行へとつれていってくれます。 今までに作ったバッジの数は 8000 個を超え、 それぞれが誰かのもとへと旅立っています。 そんな旅する“ アッチコッチバッチ ”で人気の高橋さんが、 今回は世界各国から収集した布をつなぎ合わせ、 大きな「布マップ」をつくる滞在制作に挑みます。
アート工房の空間を、 作品を見て体感できる「アッチ（＝作品コーナー）」と、 手を動かし制作を通して交流する「コッチ（＝手仕事コーナー）」にわけ、 みる・つくるを楽しめる2つの世界を創り上げます。
「アッチ」も「コッチ」も小さなお子さんからおとなの方まで、 どなたでも参加できますので、 手縫いからうまれる布の世界旅行にでかけてみませんか。

▸作家滞在制作 「布マップ」　3 月 16 日（水）－ 21 日（月・祝）
3 月 26 日（土）－ 27 日（日）

▸ワークショップ　アートアンツ × 高橋彩子 「“ 段ボールバッチ ”を作ろう！」
3 月 19 日（土）－ 21 日（月・祝）
3 月 25 日（金）－ 27 日（日）

▸アーティストトーク「トークで旅する」 3 月 21 日（月・祝）

【同時開催】作品展示　3 月 19 日（土）－ 29 日（火）
会場:Leto（金沢市南町 3-34）


アッチ
（作品コーナー）
見る！体感する！
コッチ
（手仕事コーナー）
つくる！
布マップ
ワークショップ
「布マップ」3/19~21
滞在制作を行います。
「高橋さんが制作していたら
声をかけて
一緒にチクチクしましょう！
アートアンツ × 高橋彩子
「“ 段ボールバッチ ” を作ろう！」
入口
滞在制作の様子など
WEB サイトで
アップしていきますね
のぞいて見てね！

アーティスト・イン・レジデンス
高橋彩子
布で世界を
旅する。

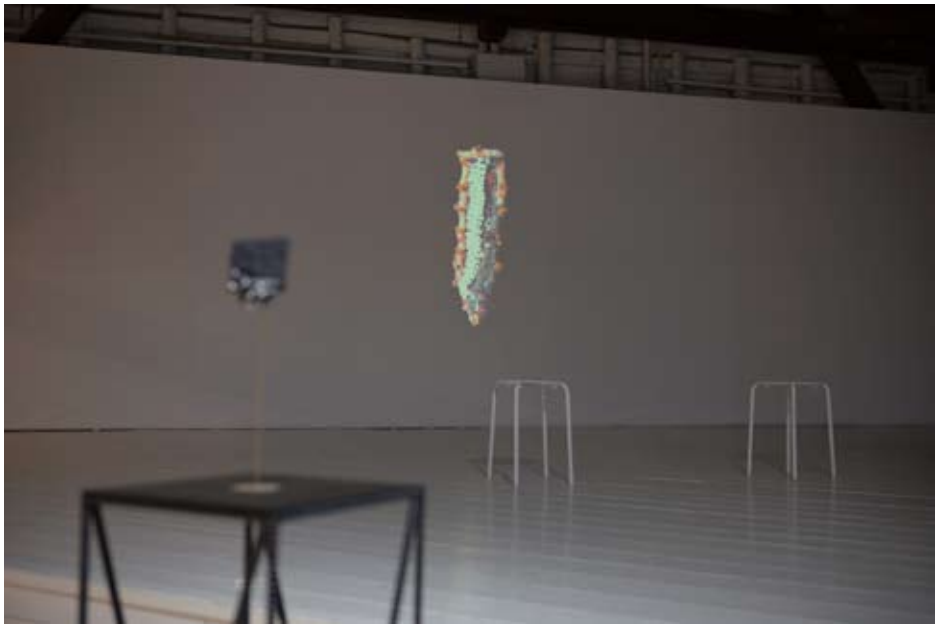
《布の森》2022

Acchi Cocchi Bacchi
"Bacchi Works"
Launch Exhibition
Sat. 21 Nov.
- Sun. 6 Dec.
2020
12:00 p.m.
- 20:00 p.m.

《バッチの脳内》2022

《バッチの脳内》2022（部分）

《アッチコッチバッチ》



《アッチコッチバッチを体感する》2022

滞在制作《布マップ》2022

左上：旅の記録写真映像
左中・下：滞在制作の様子
右：会場の様子

▸ワークショップ

アートアンツ × 高橋彩子
「“ 段ボールバッチ ” を作ろう！」

▸アーティストトーク
「トークで旅する」
https://youtu.be/LvQApGpdbm0

高橋彩子 Takahashi Saeko
アッチコッチバッチ主宰

1977 年　横浜市出身
2003 年　メキシコに渡り、メキシコ人女性の主宰する人形劇団の一員として、人形劇の制作に携わる。
2010 年　世界中の民族衣装や装飾品を素材に“アッチコッチバッチ”を制作。会社員として勤務するかたわら、展示・販売などを行う。
2016 年より生業を移す。ワークショップなどの運営も行う。
www.saekotakahashi.com

アーティスト・イン・レジデンスを終えて

無事にスタートし終えられたことにほっとしているし、反面、正直今後を迷ってもいる。

当初、ディレクターであるモンデンエミコ氏からの依頼は、アーティストという仕事についての話をすることであった。初めての依頼ではあったが、経歴や仕事の進め方、そこに海外での布の買い付けの話をまぶせばいいのであろうと気楽に考えていた。が、打ち合わせに行ってみると依頼には展示を含んでいた。となると、この仕事の依頼がなぜ私にきたのか、正直わからなかった。

そもそも私は自らをアーティストと名乗ったことはない。“バッチのおばさん”を自称し、商品と作品の間を漂うモノを作ってきた。仕事の依頼は、あくまで「売り上げ予算」ありきで、7割販売して予算が達成するようバッチを用意する、そんな仕事をしてきた。

それよりなにより、私の作っているものは小さい。空間とのバランスが取れない。

しかし、どうやら彼女には迷いがない、ように見える。まず、彼女は私の作っているものを、商品ではなく作品として見ている。そして「彫刻作品」と感じているという。だとしても、あまりに巨大な空間を目の前に、ここで何ができるのかの想像すらできなかった。それでも、なぜか仕事を受けていた。滞在中に、布で世界旅行を体験するような「地図」をつくろう、それだけを決めた。彼女は経験値から、なにかできる確信があったのだろうか。

私はといえば、あの空間で何ができるのか想像ができない日々が続く。そんな私の頭にはモンデン氏から発せられた「彫刻」というキーワードが常にあった。そして彼女が考案した「ダンボールバッチ」企画の斬新さに、作ることが好きな原点に戻り、なにかが動き出す感覚があった。ここで求められているのは、予算を積み上げることでも、新しい作品をお披露目することでもない。「彫刻」と企画者に見えているこのバッチをとりまく世界を解放し、広げることだ。幸い「彫刻」はモンデン氏の専攻分野であり芸術村の得意分野のようだ。ここを作品で埋めることは不可能だが、彼女となら、バッチの世界を広げることはできそうに思えてきた。

同時にバッチのはじまりとなる世界中の布や装身具という素材の世界観を体験してもらいたいという思いも募る。「ダンボールバッチ」のワークショップで実際に素材に触ってもらえれば、素材のなかにある文様や風合いを面白がってもらえるのではないか。「彫刻」と「ダンボールバッチ」というモンデン氏からのヒントで、私の日々の制作活動と芸術村がどんどん繋がっていく感覚があった。

今回、実際に行った展示の具体的なプランが固まったのは、金沢に行く3週間ほど前だ。正直その場で行わなければならない作業が多く、出たとこ勝負ではあったし、到底自分ひとりでできるようなものではなかったが、そこは、モンデン氏から聞いていた市民ボランティア”アートアンツ”が積極的に関わって、おもしろがってくれるであろうという妙な確信があった。

メインにするのは素材を体感し、空間に動きを出すための「布の森」。天井から大量の布を吊り下げ、大きなバッチを作ろうと考えた。これはアンツに全面的に委ねた。私のプランは布を吊り、塊に見せることであったが、彼らはリズミカルに吊り下げ高さを演出するだけでなく、布を渡して広げ、面で見せる工夫をしてくれた。会場に入るとまず目に入る位置に設置された「布の森」は、この展示のシンボルツリーのようにもなり、同時に妙な違和感を生むことができたとも思う。

バッチの解放という課題には「バッチの脳内」と称して制作過程を壁面に書きつけた。布の森と同じ舞台上にある壁に、森で体験した布たちがどのようにバッチになるかを解説。ここは、編集企画という前職での経験が生きたように思う。バッチをテーマにした見開きの雑誌の誌面をつくろうと考えた。

その先のスペースには、モンデン氏の言葉を信じ、「彫刻作品」のようにバッチを展示した。恐怖の広さは、贅沢な空間となり、泳ぐようなバッチを見ることができた。

そして、「ダンボールバッチ」。モンデン氏がアートアンツとともに改良を重ね、先に繋がるコンテンツになったと思う。紙を切り、素材を拾い上げる作業はバッチ作りを追体験してもらえたし、布ではなく紙にすることにより、自由度は上がり、一方造作の難易度は下がり、子どもを含め多くの人に楽しんでもらえる企画となった。できない、から出発するのではなく、どうしたら実現できるかを考え続けたモンデン氏はじめ芸術村のみなさんに頭が下がる。

企画当初に決めた「マップ」制作。思ったように地図が広がっていかず消化不良の気持ちもあるが、途中からは「ダンボールバッチ」も共に縫いこんでいき、この空間・時間でしかできないものとなった。アートアンツが素材となるダンボールの布を用意してくれ、共同作業ができたと思う。みなで作りあげたものとなった。

イメージトレーニングをしては行ったが、やはり再会した空間は以前より巨大に思えた。怯みはしたが、この空間に居られることの幸せが大きくなっていった。バッチの晴れ舞台を用意でき、バッチへの恩返しができたとも感じている。一方で冒頭で申し上げた通り、この麻薬のような強烈な経験を通して、後には引けない、という別の恐怖心や迷いも生まれている。依頼の当初、空気を動かす挑戦を求めてはいたが、大きすぎる挑戦でもあった。が、やり終わって、こんな刺激的な経験をまた引き寄せたいという思いがある。懲りない。

最後になるが、今回の機会を与えてくれ、企画を練り、準備をし、可能性を信じて並走してくれたディレクターのお二人に感謝したい。そしてアンツのみなさん、深夜まで諦めずによき空間をよき企画を、と付き合い続けてくれたことに感謝します。みなさんの情熱にささえられました、またいつか芸術村のみなさんと仕事ができるよう精進します。

高橋彩子（アッチコッチバッチ主宰）

バッチの繋ぐ物語

アッチコッチバッチを見ると、まずその姿の多様さに驚かされる。ユーモラスだったり可愛らしかったり、はたまた生き物のようだったり何かの呪具のようだったり、一つとして同じものがない。バッチというよりも、それぞれが強烈な個性を放つキャラクターといったほうが適切かもしれない。展示会場でじっとしているのが窮屈そうですらある。誰かの胸元に陣取って、世界を旅する日を夢見ているのだろう。

アッチコッチバッチが「アッチコッチ」である所以は、まさにその「旅」にある。バッチの素材は、世界の様々な地域から集められた布である。必ず 2 か国以上の布を用いて制作される。そこでは遠く隔たった土地の布どうしが、不思議なほど調和して同居している。それら布は単なる素材ではなく、それぞれの来歴を携えてバッチを形作っている。

思うにアッチコッチバッチが人々の心をとらえるのは、布が持つ物語が多層的に折り重なっているからではないだろうか。ある集団において長い年月をかけて作られ、身につけられてきた布を、作家が旅の途上で見つけ、まったく異なる場所の布と作家自身の手によって組み合わさり、一つのバッチになる。小さなバッチには時間も場所も異なる複数の物語が重なり合っている。そしてそのバッチを身に着けることで、ほかならあっぷぬ私自身もバッチが紡ぐ物語に参加することになる。それは、資本主義がドライブする刹那的なモノの消費とは真逆の、モノとの幸福な出会いにほかならない。

私たちは普段、手にするモノの来歴について、どれほど注意を払っているだろうか。生鮮食品の産地くらいは気にするかもしれない。しかし、身の回りのモノについて、それを誰がどこでどのように作られているか意識することはまれである。あくまで自分が差し出す対価に対してモノの効用がいかほどかを考量し、使い、捨てるのが今を生きる消費者の正しい態度である。

近年によく聞くようになった「コスパ」という 3 文字が、それを象徴的に表している。「コスパ」は、費用対効果を表す「コストパフォーマンス」という言葉の単なる略語ではなく、モノに対する現代人の態度表明といえる。肝心なのは、少ない対価でより多くの便益を引き出すことであり、モノが持つ物語はさして重要な意味を持たない。そこで語られるのは、あくまで表層的な欲望を喚起するために広告が付与する出来合いのストーリーである。

対照的にアッチコッチバッチは、それ自身が持つ物語ゆえに私たちを惹きつける。物語とは、人がモノを手にするときに抱く、本質的な欲望である。その理由を、私たちは「象徴価値」をめぐる議論の中に見出すことができる。

経済学の教えるところでは、商品としてのモノには使用価値と交換価値の二つの価値が存在する。例えばガソリンの使用価値は内燃機関の燃料となるところにある。これはガソリンというモノ自体に内在している価値である。一方の交換価値は需要と供給のバランスで決まる相対的なものである。ほんの十数年前までガソリンは 1ℓ100 円前後だったが、世界情勢をめぐる需給状況の変化で現在は 170 円前後にまでなってしまった。

第二次世界大戦後の消費文化華やかなりしころ、ボードリヤールはそれら二つとは異なる価値を付け加えた。消費社会において人々は、社会的地位や他人との差異を表現する記号や象徴を消費することを欲望するようになる。このように、あるモノを差異化の記号としてとらえたときに見いだされるのが「象徴価値」である。それは、いわゆるブランド品において端的に示される。使用価値とは関係なく、それを持っていること自体がステータスになるのである。

しかしながら、社会的差別化というのは象徴価値の持つ一つの側面にすぎない。内田樹は象徴価値の原初的形態であるトロブリアンド群島の「クラ」という儀礼に着目し、象徴価値が物語を通じて人と人を結びつける過程に注目して見せる。

クラは、群島内に散らばる集団が、貝でできた装飾品を交易するという形で行われる。クラに参加できるのは集団の中で特権的な地位にある者のみで、自分が受け渡しをする相手は決まっている。装飾品を受け取ったら、しばらく所有したのち、次の相手へと渡さなければならない。これによって異なる集団同士を結ぶ円環状のネットワークが構築される。ここでは象徴価値を持つ装飾品が、異なる集団同士を結び付ける役割を果たしている。

それだけではない。クラのメンバーは、その装飾品の来歴（誰の手に渡ってきたか）や、それを持つことが集団にとってどれほど重要で栄光なことであるかを語りたがるそうである。クラの装飾品には物語がつまっている。「この装飾品をもっている人間がある種の社会的威信を発揮しうるのは、その装飾品が「無尽蔵の物語」を発信するからなのである」（内田樹、『期間限定の思考―おじさん的思考 2』）。

> 象徴価値を持つ財貨は、持っている人と持っていない人を差別化するためではなく、所有する人々をある神話体系の中でひとつに結びつけ、全員が主体的にその「神話」に新たなエピソードを書き加えつつ参与するという快楽を提供するために存在するのだ。
>
> （中略）
>
> 象徴価値の本質はなによりも「物語」を共有することによるネットワークの立ち上げにある。
>
> だから、君があるブランド品を欲望するのは、単に「金がある」とか「センスがいい」とかいうことを誇示したいがためにそうするのではなく、それを核とした「物語」を介して、他社と結びつきたいという切実な欲望に駆動されてのことなのだよ。
>
> （内田樹『期間限定の思考―おじさん的思考 2』角川文庫、2011 年、113 頁）

アッチコッチバッチが出来上がるまでには、複数の人間の、生身の手が介在している。糸をつむぐ手、布を織る手、バッチに仕上げる手によって、豊かな物語が織り込まれていく。それは、その布を持つ民族の物語であり、世界を旅するの物語であり、それを手にする私の物語でもある。バッチを手にすることは、会ったことのない誰かと物語を共有し、バッチが媒介する関係性の網目の中に身を投じることにほかならない。

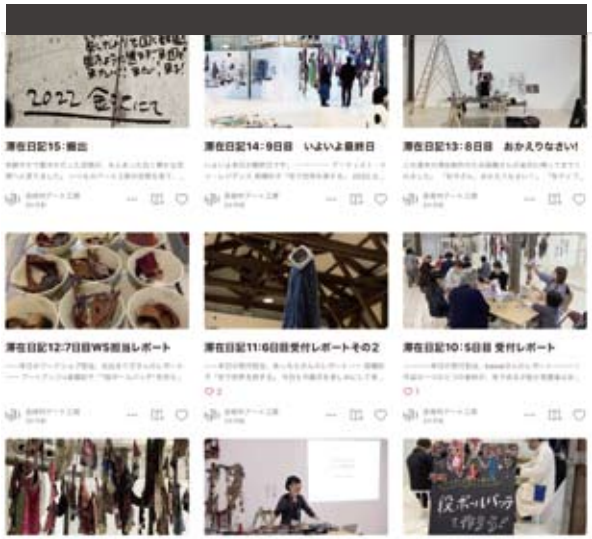
パンデミックによって、私たちの生活が限られた範囲に押し込められて久しい。その中にあってアッチコッチバッチが輝きを放つのは、単に異国への憧憬を掻き立てるからではない。それを手にすることで、遠く隔たった誰かとつながることができるからである。

バッチが紡ぐ物語は終わらない。軽やかに世界を旅しながら、私とあなたを結びつけてくれるはずである。

渥美　俊太郎（アートアンツメンバー／専門研究：芸術学）

滞在制作日記

アートアンツが、
12 日間の様子を、
note にレポートした。



今日も今展示を楽しみにして来られた方はもちろん、お散歩コースのちょっとした寄り道など、様々な方が展示に足を運んでくださいました。

世界の民族衣装や装飾品、それぞれのカケラを組み合わせたり、ほぐしたり、ぬがせたり、重ねたり、巻き直しながら作られたアッチコッチバッチ。

中でも私が好きなバッチは、ギャザースカートを糸の状態までほぐし、作られたこのバッチ。よーく観察すると糸が細かく、ちりちり波打っていて、とても可愛い。布をほどいたらこんな風に織られていた跡が糸に残るんだな〜‥。

一枚の布がまったく違う形で生まれて変わるなんて本当に不思議です。

ただ、形が変わっても真っ白な 0 から生まれ変わるのではなく、たくさん触られた布の匂いやくたっと感がちゃんと残っており、人の気配や時間の厚みをたくさん感じる事が出来ます。

なかなか言葉では伝えきれない魅力があるので、是非会場まで観に来てください！

（あっちも 2022.3.24）

作品の一つひとつの素材が、布であるが故か来館者は女性が多いです。男性のほとんどの方は一周されると、手持ちぶさな様子ですが、女性の方は少なくても 10 分以上鑑賞されています。今までの作品展示会では、なかったように思います。お勧めの作品は、個別ではなくて、布一枚いちまいの文化が集まった異文化の集合態、すなわち異文化コミュニケーションであり、展示作品すべてがひとつの表現と思います。

（kawai 2022.3.24）

鑑賞者の感想

・さまざまな国の布が気持ち良さそうに揺れていて、現実の世界も戦争のない平和な世界であればいいのにと思った。

・異国に来れた気持ちになりました。

・会場全体から作家やバッチ、布を作った人の熱量を感じるような熱い展示でした。

・作家が実際につくっているところを見ることができ、トークではバッチへの想いなど生の声をきくことができファンになりました。

・こどもが作ったバッチ、素敵だし絶対に飾ります！

・見てふれて作れて、素晴らしいバランスで満喫しました。とてもいい企画ですね。友人にもおすすめします。

搬入出の様子

謝辞

本展開催にあたりまして、ご協力を賜りましたアーティスト、 すべての
関係者の皆様に、 感謝の意を表し厚く御礼申し上げます。

高橋彩子

アートアンツ：
阿知波まどか、 渥美俊太郎、 金山麻里、 金山洋子、
河合和敏、 北出まり子、 新木修、 田井麻子、 寺西由佳、
野口良一、 長谷和明、 渡辺碧、 渡辺秀亮、 渡辺杏

鈴木由美、井上タツ子、小河原郁代、小山千夏、新宮睦、藤井千絵、
Leto

アーティスト・イン・レジデンス
高橋彩子「布で世界を旅する」

会期：2022 年 3 月 19 日（土）ー 3 月 27 日（日）
会場：金沢市民芸術村アート工房（石川県金沢市大和町 1-1）

主催：金沢市民芸術村アクションプラン実行委員会
共催：金沢市、 公益財団法人金沢芸術創造財団
企画・担当：金沢市民芸術村アート工房ディレクター
　　モンデンエミコ・宮崎竜成
表紙タイトルデザイン：十月のオクトパス
カタログ編集・デザイン：モンデンエミコ
写真撮影：池田ひらく、 野口良一、 宮崎竜成、 モンデンエミコ

発行：金沢市民芸術村アート工房（石川県金沢市大和町 1-1）
TEL 076-265-8300（代表）
本書の全文または一部の無断での転載・複製はご遠慮ください。